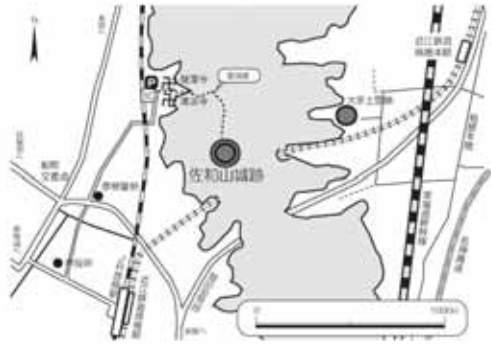


佐和山城跡

—その歴史と山に遺されたもの—



アクセスマップ

龍潭寺前登山道口へ)

JR彦根駅および近江鉄道彦根駅から徒歩 45分

佐和山城大手へ

近江鉄道鳥居本駅から徒歩 30分

佐和山城へ登城されるみなさんへ

佐和山城跡は、清凉寺や龍潭寺などの所有する山です。山での火の使用はおやめください。ゴミは各自で持ち帰るなどして、大切な文化財の保全にご協力ください。また、団体で登山を計画される場合は、山の所有者である清凉寺や龍潭寺の了解を得るようにしてください。

埋蔵文化財活用ブックレット5（近江の城郭1）

佐和山城跡

刊行：平成22年9月28日

編集：滋賀県教育委員会・彦根市教育委員会

制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課

住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号

電話：077(528)4674・FAX:077(528)4956

e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp

印刷：共栄印刷株式会社



目次

1 . 佐和山城の位置	1
2 . 佐和山城の歴史	3
3 . 佐和山城の遺構	6
4 . 発掘された佐和山城の城下町	19
5 . 佐和山城落城。そして彦根城へ	23
6 . 年表 佐和山城をめぐる攻防の歴史	28
7 . 佐和山城周辺の文化財	32

佐和山城跡の図面中に記した 写 → は、挿図写真の撮影ポイントを示しています。なお、撮影箇所が危険な場合は、番号を記載していません。

本埋蔵文化財活用ブックレットは、彦根市教育委員会と滋賀県教育委員会が協働して原稿を作成し、滋賀県教育委員会が国庫補助金（埋蔵文化財保存活用整備事業）を受けて刊行した。

1 . 佐和山城の位置

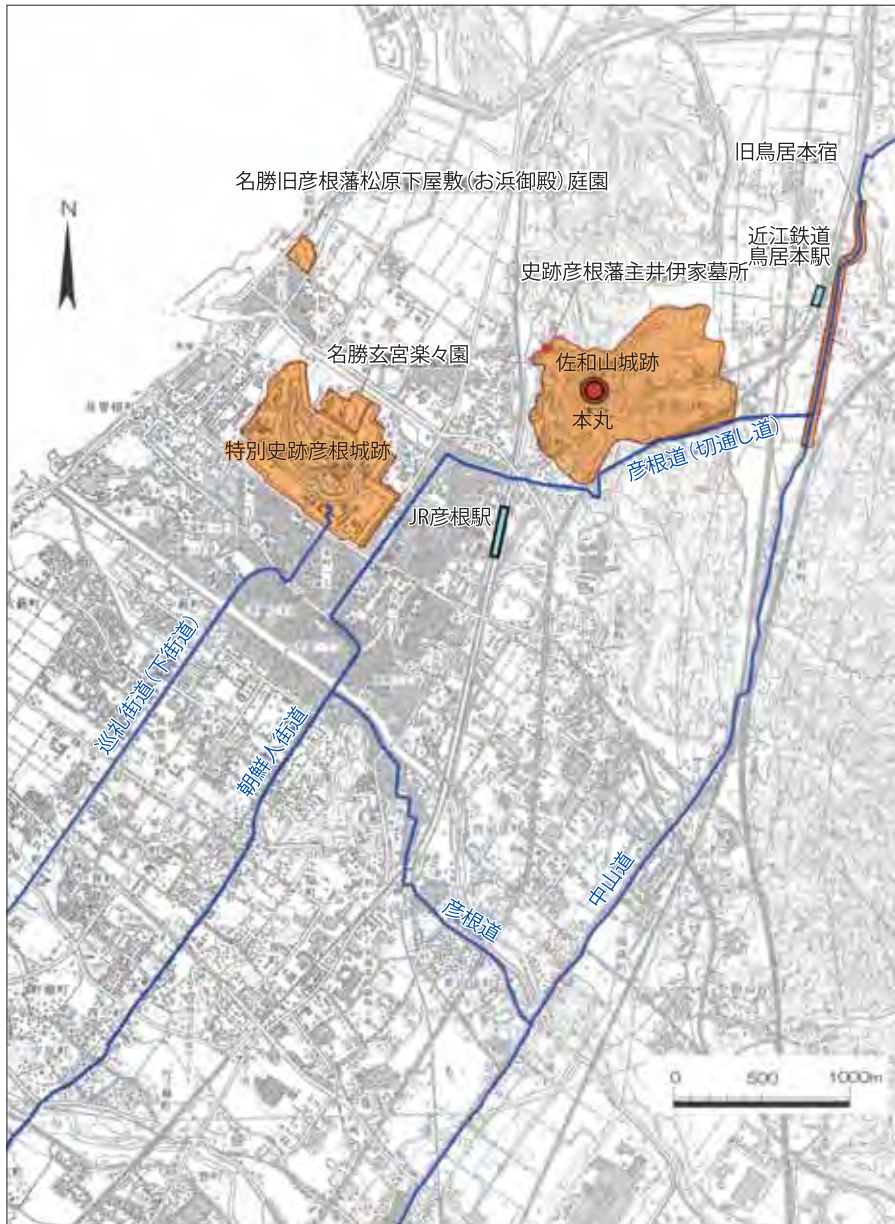
彦根市の北東、特別史跡彦根城跡から東に約 2 km離れた位置に台形をなす佐和山がそびえています。佐和山の標高は 232.9 m、もともとは鈴鹿山系と連続していた尾根が沖積作用によって埋め残されたチャートを中心とする層で構成されており、風化して層状に剥離しやすい山です。

江戸時代以前の佐和山の周辺景観を描いた絵図として、「彦根古図」があります。中央に彦根城築城以前に彦根寺が鎮座した彦根山を描き、芹川が分流して琵琶湖に直接注ぐ流れと北東の松原内湖に注ぐ流れが描かれています。彦根山の南西から北東にかけては「淵」や「池」などの描写が見られ、芹川によって三角州が形成されて、湿地が広がっていた様子が観察できます。こういった周辺環境は、江戸時代に井伊家が彦根に入封し、大規模な城下町を建設する際に埋め立てられ、現在の景観に変化しました。

周辺の環境としてもう1つ注目しなければならないのが交通網の存在です。東山麓に東山道が南北に走り、西山麓は松原内湖に面し、港が置かれていました。このように佐和山城は、陸上交通の上でも、湖上交通の上でも非常に重要な位置に存在しています。この佐和山の山頂部分の本丸を中心に佐和山城は築城され、発達していきました。



彦根古図 (個人蔵)

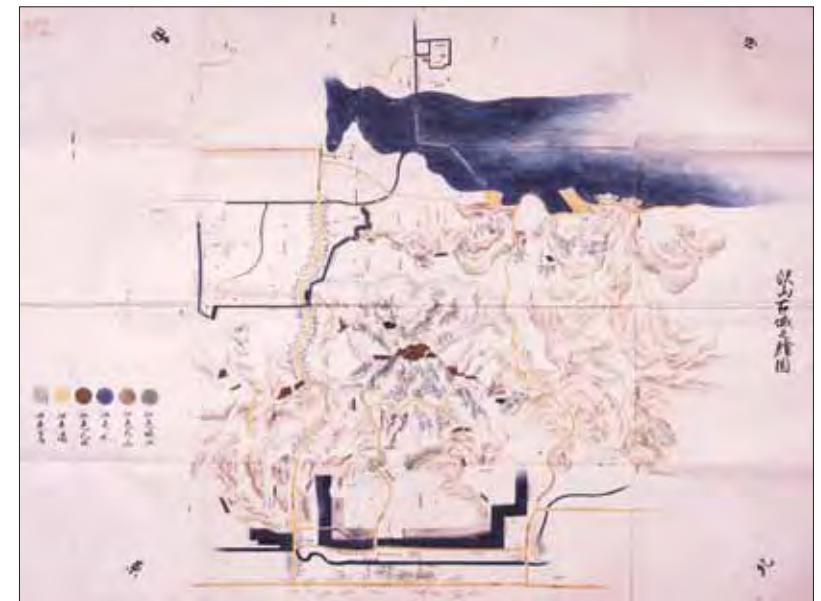


佐和山城跡位置図

彦根城の東約2kmはなれた場所に佐和山城が存在します。東山麓には中山道が縦貫しています。

2. 佐和山城の歴史

佐和山城の歴史は古く、鎌倉時代初期、近江源氏・佐々木定綱の6男時綱が、佐和山の麓に館を構えたのが始まりと伝えます。その後、佐々木氏は江南の六角氏と江北の京極氏に分かれて対立し、佐和山城は両勢力の境目の城として攻防が繰り返されました。戦国時代に入ると、江北では京極氏に代わって浅井氏が覇権を確立し、江南の六角氏との間で佐和山城争奪戦が展開されることとなります。天文4年(1535)には六角定頼が浅井亮政・京極高延を攻めて佐和山城を手中に収めます。天文21年(1552)には京極高広(高延から改名)が反撃して六角義賢と戦い佐和山城を攻めて占領します。京極に代わって勢力をもった浅井氏は、百々内蔵介を佐和山城代とし、肥田城の高野瀬秀隆を誘って味方に付けて六角氏と対峙します。このように六角氏・京極氏・浅井氏の三つ巴の争いが佐和山城を中心として繰り広げられました。



佐和山城絵図(彦根城博物館蔵)

江戸時代中期の佐和山の景観に、三成段階の佐和山城や城下町に関する伝承を文字で書き込んだ絵図。山頂に天守跡や二の丸・西の丸、東山麓に城下町、西山麓に松原内湖とそこに架かる百間橋が描かれています。現在、同種の絵図が3種類確認されています。

しかしながら、この三つ巴の様相は、上洛のために美濃からやってきた織田信長によって一変してしまいます。永禄10年(1567)に岐阜に入った信長は、浅井長政に妹お市を嫁がせて姻戚関係を結び上洛の足がかりとします。その翌年には六角氏の観音寺城を攻め、いったん近江を制圧しますが、その反動は早く到来しました。近江の反信長勢力を中心に、いわゆる元亀の争乱が始まるのです。この中で、浅井長政は朝倉氏と同盟を組み、信長に反旗を翻します。一時信長は窮地に陥りますが、態勢を立て直して浅井・朝倉の連合軍を元亀元年(1570)姉川の戦いで破ります。浅井氏は北の小谷城と南の佐和山城に逃げこみます。信長は北の小谷城に対しては木下秀吉を配置し、佐和山城に対しては東の鳥居本に丹羽長秀、北の山(物生山)に市橋長利、南の山(里根山)には水野信元、彦根山に河尻秀隆を布陣させて包囲し、佐和山城攻めが行われました。『信長公記』には「七月朔日、佐和山へ御馬を寄せられ、取詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰付けられ、丹羽五郎左衛門置かれ、北の山(物生山)に市橋九郎右衛門、南の山(里根山)に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取詰めさせ、諸口の通路をとめ、…」と



元亀元年(1570)の佐和山籠城戦

佐和山城の磯野員昌に対して、東西南北に信長方の武將が配置され、包囲網が形成されています。

いう記述があり、佐和山城を包囲するように陣城が築かれ攻城戦が行われた様子を伺うことができます。この中で磯野員昌は約8カ月の間佐和山に籠城し、よく耐えますが、最後は信長に降伏してしまいます。

この後、天正元年(1573)の小谷城攻めで浅井氏は滅び、信長は近江を完全に制圧します。

織田信長、そして次の羽柴(豊臣)秀吉の時代にも、佐和山城は近江の要衝を守る城として重視されました。信長は佐和山城に重臣の丹羽長秀を配し、安土城築城までの間、佐和山城が近江支配の核、京都と岐阜との中継拠点、西国への最前線という機能を維持していました。秀吉の時代も、堀秀政、堀尾吉晴、そして五奉行筆頭の石田三成の入城と、佐和山城に重きを置く姿勢は変わりませんでした。



石田三成肖像(龍潭寺蔵)



佐和山城絵図に見る百間橋(彦根城博物館蔵)

この間、佐和山城はしだいに整備され、三成の時代には山上に本丸以下、二の丸・三の丸・太鼓丸・法華丸などが連なり、山下には東山道に面して大手門が開き、2重に巡らされた堀の内には侍屋敷・足軽屋敷・町屋などの城下町が建設されました。また、琵琶湖に面した佐和山西麓にも侍屋敷や米蔵、松原の湊につながる百間橋が敷設されている状況が井伊家に伝来した「佐和山城絵図」から読みとれます。城下を含む佐和山城全体の規模が最大となる三成段階には、琵琶湖を介した湖上交通が重視されていたと考えられます。

3. 佐和山城の遺構

佐和山城跡は天守や櫓などの建物がまったく現存せず、石垣などもほとんど残っていないとされ、その実像は不明でした。ところが詳細に地表面観察を行い、測量調査を実施すると、随所に城郭遺構が残存していることが判明しました。例えば山頂の本丸は、井伊家の破城により天守台を9間ないし7間(18m~14m)切り落としたとされ、徹底的な破壊が行われたと考えられてきました。しかし、近年の調査で本丸を囲む土塁や虎口、櫓跡と思われる遺構、さらに東斜面と西斜面では石垣の基底部を確認しています。

また、旧東山道側に展開する大手には、谷筋の侍屋敷跡を囲むように幅13m、高さ2m、総延長165mの巨大な土塁が巡っており、中央には大手門跡が開きます。土塁の外側には内堀があり、その外にはかつての本町筋の道路が存在します。そこからやや距離をおいて外堀の機能を合せもった小野川が外周を流れ、江戸時代に描かれた「佐和山城絵図」とも符合する遺構群を見ることができます。本町筋では水田の中に旧町屋の井戸跡も確認されています。



女郎ヶ谷 写真

関ヶ原合戦後の佐和山籠城戦で城内にいた女性達が身を投じたと伝える谷。

西の丸曲輪群

この曲輪群は大きく上下2つの曲輪とそれをつなぐ城内道で構成されており、現在龍潭寺のある搦め手(かもう坂通往還)を見下ろす位置であることから、搦め手からの敵の侵入を防ぐために築かれたと考えられます。搦め手側にあたる北東面に土塁を築き、豎堀を掘るなどして防御の正面として龍潭寺からの登城道を意識しています。これまで注目されることのなかった曲輪群ですが、平成19年度の測量調査で遺構の詳細が明らかになりました。



西の丸に残る土塁 写真

西の丸は3段の曲輪で構成されていますが、これはその最下部の曲輪西側に築かれた土塁です。高さ約1.2mが残存し、この土塁の上面が現在の本丸への散策路となっています。土塁の上面には本来、柵か塀が築かれていたと考えられます。

最下部の曲輪南東の切岸 写真

3段構成の西の丸の最下部にあたる曲輪の南東の切岸です。切岸とは、高石垣で普請するような近世城郭に発達する以前の中世の山城に多く見られる防御施設で、山の斜面を急峻に切り崩すことで、敵の侵入を防ぐことを目的としたものです。

佐和山城の切岸の中でも、この部分は残りがよく、往時の佐和山城の姿を私たちに見せてくれます。



佐和山城縄張図

中井 均氏作成図に着色・加筆





西の丸の北端の堀切 写真

龍潭寺から鳥居本へ抜ける切り通しを兼ねるもので、岩盤を切り崩して成形されています。北側の尾根から敵が侵入するのを防ぐ目的で造られたもので、西の丸上部には敵の侵入に備えた番小屋跡と考えられる平坦地が確認できます。

本丸

佐和山山頂（標高 232.9 m）に位置し、東西約 100 m、南北約 45 mを測ります。享保 12 年（1727）、7 代井伊直惟の命で彦根藩普請方が佐和山城についての聞き取りを行った『古城御山往昔咄聞集書』に「本丸天守茂只今之より高く御拝領之後御切落シ被遊候由、九間御切落とも云又七間とも申候実説相知レかたく」と記されており、破城（城破り）が井伊家によってなされ、石垣部分、虎口部分、天守台部分は著しい破壊を受けたと伝えていますが、部分的には算木積みみの石垣等が確認できます。虎口跡については、本丸西端に見られるもので、わずかな凹みによって虎口の旧状を伺うことができます。



本丸 写真



本丸東隅の石垣 写真

算木積みという技法で積まれており、石垣隅部と考えられます。石材は、チャートで在地の岩石が使用されています。



千貫井

中世の築城手引書である『築城記』（群書類従二十三 武家部）には、城を築く上で水の確保が非常に重要であると書かれています。籠城戦では、飲み水の確保が最重要課題です。高所に位置するこの千貫井はまさに「千貫」の価値がある井戸であったためにその名前が付けられたと考えられます。



千貫井 写真



石垣

本丸からの眺望

本丸からは北東方向に伊吹山を一望することができます。また、反対の南西方面には織山を見ることができます。つまり、京極氏の上平寺城と六角氏の観音寺城を両方見ることができる位置に佐和山は所在しています。すぐ前面には東山道が縦貫しており、また、北西から北東には琵琶湖も視野に収まります。このため、そこを行き交う人々の動きを手取るように観察することができます。佐和山は城郭が造られる典型的な立地環境にあるといえるでしょう。



伊吹山を望む 写真

本丸の周囲に残る石垣

石垣の痕跡は数カ所で見ることができます。千貫井の上方斜面にも井伊家による城割を免れた石垣が部分的に残っています。いわゆる野面積みで、在地の石材で積まれています。



転落した石垣の石材 写真

本丸南側の削平地

『佐和山城絵図』では、「つき見櫓」「月見櫓跡」「丸跡」等と記されている部分です。4段構成の平坦地が削平されおり、本丸を守るための曲輪であると考えられます。つき見櫓の下段の平坦地には土塁状の高まりが設けられており、つき見櫓とこの高まりとで侵入者の動きを制限し、通路を櫓の下に沿って回すことで櫓からの攻撃面を増やすという仕組みだったのでしょう。



本丸南側の削平地部分測量図



土塁付近から本丸を見上げる 写真

二の丸

本丸跡から北東に延びる尾根頂部を活用して築かれた曲輪の1つです。二の丸跡は尾根頂部を削平して「く」の字形に伸びる3つの曲輪で構成されています。

北曲輪の北側には、大堀切が存在し、幅約10m、深さ約6mの規模を誇り、佐和山城跡の北、水の手方面からの進入を防備する施設と位置付けることができ、『佐和山城絵図』によると石田三成が城主の時代には兄の正澄が居り、関ヶ原の合戦を経て井伊直政が入城すると家臣の木俣守勝が詰めていたと記されています。



二の丸北端の大堀切 写真

二の丸部分の測量図



かもう坂通往還

別称、龍潭寺越えと呼ばれる道で、佐和山城の北端を東西に走る道です。陸路の東山道と湖上交通の松原内湖及び琵琶湖を結ぶ重要な道で、

旅人も往来していたようです。この道は龍潭寺前から延びる百間橋に連絡して松原にあった蔵屋敷につながる道で、佐和山城にとっては搦め手としての機能を持っていたと考えることができます。

大手城下町

侍屋敷跡は、東山道側にあたる鳥居本と松原内湖に面した古沢町の両方に広がっており、とくに鳥居本側には土塁と堀が良好に残り、往時の姿を想像させてくれます。2つの谷をそれぞれ堰き止めるように土塁と堀が設けられ、南側の谷のものが『佐和山城絵図』には「元大手門」と記述されています。また、佐和山城の大手門及びそこから延びる道が登城道に当てはまり、この部分の土塁は現在失われている部分も多いですが、総延長で約200 m以上、最高所で約2 mを測るといふ巨大なものです。絵図には門から南が「土居四十間」、北が「土居四十五間」と記され、堀跡も描かれています。その外側には外堀との間に城下町としての「本町」が存在します。「本町」は彦根城の城下町建設にあたって「本町」の名前を残したまま京橋口から伸びる道の両側に移住させられました。この本町は現在はキャスルロードとも呼ばれており、道沿いにある宗安寺の赤門が佐和山大手門の移築であると伝えています。



大手口跡 写真

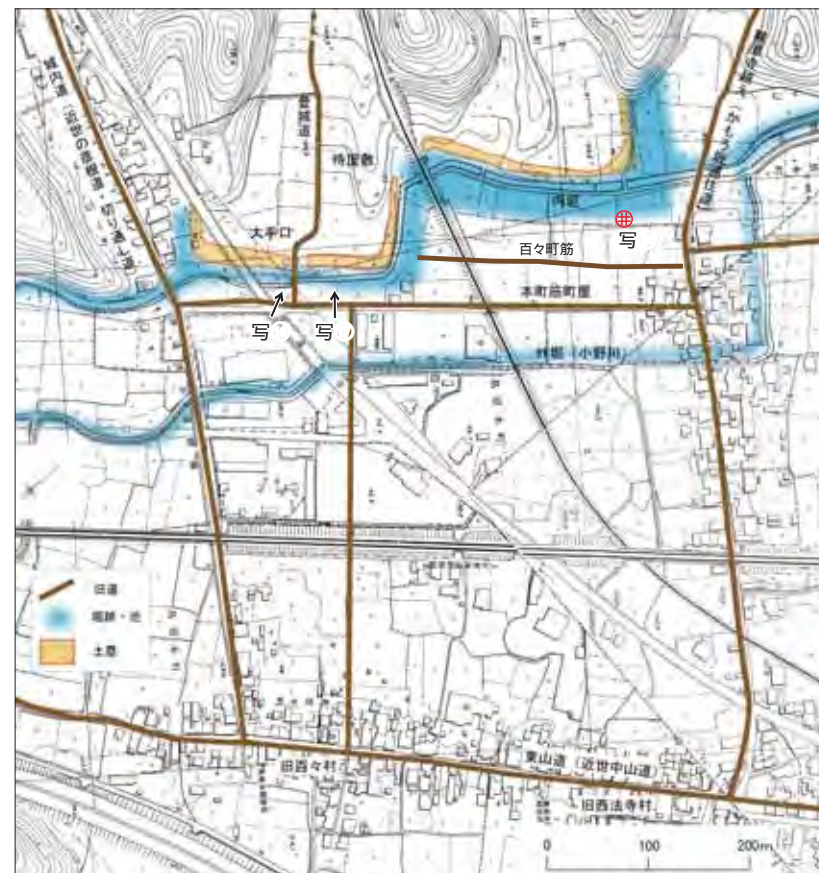


宗安寺赤門



大手の土居（土塁） 写真

北側の小字奥ノ谷と呼ばれる谷にも同様の土塁が残っており、侍屋敷が存在していたと考えられます。



佐和山城大手周辺復元図



佐和山城絵図 大手周辺部分（彦根城博物館蔵）

佐和山の南西麓の近江鉄道が通る谷は、「モチノ木谷」と呼ばれます。堀跡を部分的に観察することができるこの「モチノ木谷」は、「犬上郡志」によると、三成の書院に植えられていたモチノ木が享保年間までここに存在していたことからこの名前がついたとされており、現在も小字御殿道という地名が残っています。これらのことから、この谷が石田三成の屋敷跡であると推定されています。このことから、三成段階においては、それ以前に官道であった東山道側に展開していた大手以外の範囲にも城主居館を含む武家屋敷、城下町が拡大したと考えられます。この際に大手の機能自体が、城主居館の置かれた西側に移動したかどうかは、今後の調査成果を待って検討する必要があります。

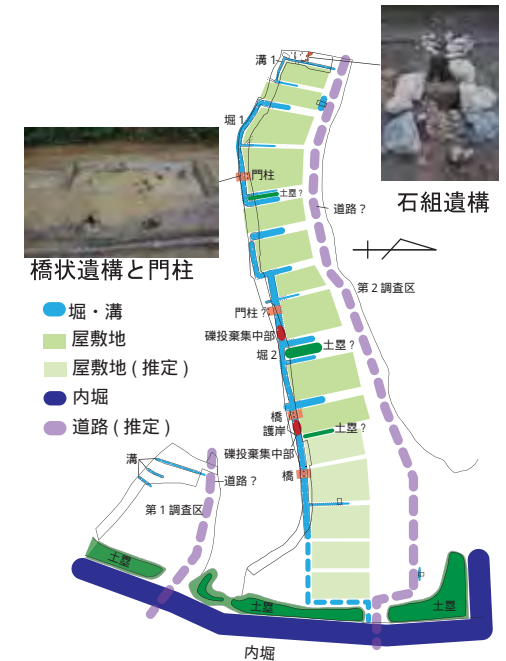


大手周辺に残る石組井戸 写真

4. 発掘された佐和山城の城下町

侍屋敷の調査

『佐和山城絵図』に「侍屋敷」と書かれた場所の発掘調査では、山裾に堀が見つかり、堀の周辺からは堀を渡って城に上る橋跡や門柱の跡などが見つかりました。また、16世紀後半頃の鉄砲の玉や小柄など武家屋敷での生活をうかがわせる金属製品、信楽焼・備前焼の播鉢や瀬戸美濃焼の天目茶碗や青磁碗などの土器陶磁器類をはじめ、下駄や漆器椀などの木製品、砥石や石臼などが出土しています。



侍屋敷の調査

出土した銅製紐金具

桐文銅製紐金具と呼ばれるものが出土しました。これは、手箱を飾っていた金具で、銅板を「五三桐」にかたどり、花や葉を蹴彫りで表現しています。葉の葉脈部分は無地ですが、その間は魚々子で表現しています。着色などの跡は残されていませんが、本来は鍍金などが施されていたと考えられています。

桐の文様は中世の金具類のモチーフとして広く用いられ、石田三成の主君である豊臣秀吉らも好んで使用しました。



五三桐

桐文銅製紐金具

やがて桐文の権威が高まると、秀吉は無許可での使用を禁じ、限られた人物にのみその使用を許したのでした。

内堀の跡

関ヶ原合戦の後、三成にかわって城主となった井伊氏によって慶長9年（1603）に彦根城が築かれるようになると、石垣などの部材がすっかり持ち去られ、壊されてしまいました。内堀の内側に築かれていた土塁も、その後、削られてしまいましたが、いまでも部分的には1～2m程度の高さが残されています。

現在、佐和山の東麓にはおまん川が流れており、これが内堀の痕跡を示すものと考えられています。

この川の東側（つまり内堀の外側）の発掘調査では、内堀が部分的にみつかりました。堀の東側から土塁までの距離が約22m。つまり堀の幅が22mあるということになり、安土城の堀と同じくらいの大規模なものであることがわかりました。当時は高い土塁と深い堀を併せ持つ堅牢な構えであったことを知ることができます。



内堀跡（赤い矢印の部分が推定堀幅）

城下町の調査

佐和山城の大手城下町では、内堀と外堀の間にも町並みが広がっていました。ここには、城下町のメインストリートであった「百々町筋」、「本町筋」が現在も、田んぼの中を通る細い道として残っています。

「百々町筋」の調査では、現道の盛土の下より、佐和山城の時代の道や道を横断する石組み溝が見つかりました。水田の畦や水路が当時の街路を踏襲している可能性が高いことがわかりました。



「百々町筋」を横断する石組み溝

画面の右上から左下へ伸びる高まりが「百々町筋」を踏襲したあぜ道



城下町からみつかったトリベ

溶けた金属を鋳型などに運ぶための受け皿です。「百々町筋」に面した屋敷地から出土しました。

「百々町筋」周辺では、城下町の賑わいを示すように、溝で区画された屋敷地や建物、井戸などが見つかりました。また、こうした井戸や溝からは、日常で使われた土器や瀬戸美濃焼きの天目茶碗・播り鉢などの陶磁器のほか、フイゴの羽口やトリベといった金属を高温で溶かして、製品を作る時に使われる道具が多くみつかりました。おそらく、金属加工をなりわいとする職人たちが多く住んでいたのでしょう。

こうした町並みは、「百々町筋」や「本町筋」周辺ばかりでなく、外堀の外側にも広がっていることが、平成22年度調査で明らかとなりました。

佐和山城下町は私たちの想像以上に大規模なものであったといえます。

建物の柱

もともと湿地であったところに城下町が造られたため、柱の根元の部分が地下水に守られて腐らずに残っていました。



点線の左側の部分が当時の街路の盛土

「本町筋」

現在の道の下約70cmのところ、当時の街路の盛土が確認され、当時の街路から位置が変わっていないことが明らかとなりました。

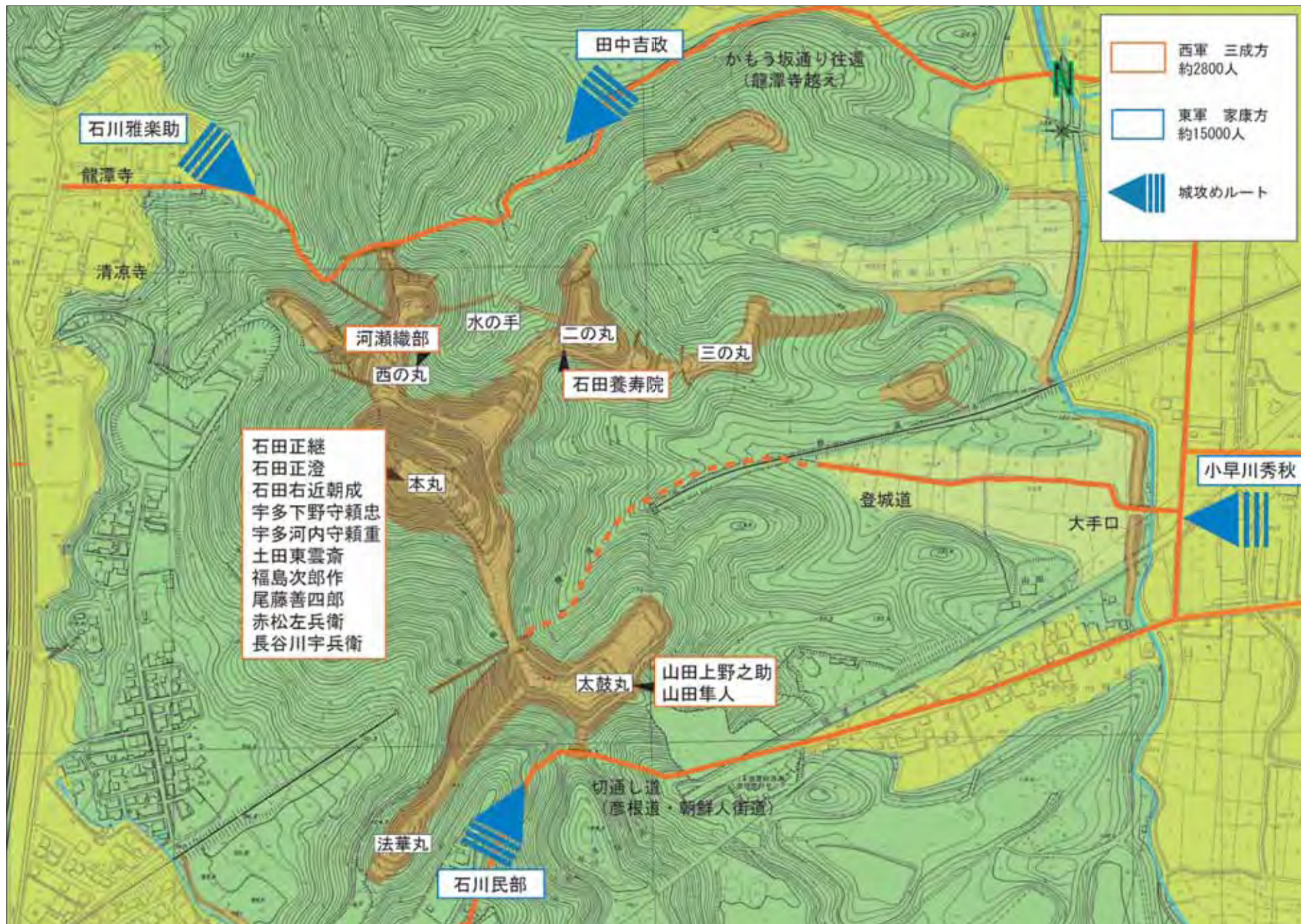


5. 佐和山城落城。そして彦根城へ

元禄11年(1698)に書かれた「石田軍記」や井伊家に伝来する「関原記大全」「関ヶ原軍記」「関ヶ原記」などによる記述から関ヶ原合戦後の佐和山城落城の様子を見ていきます。関ヶ原の合戦より遅れること2日、小早川秀秋ら関ヶ原の寝返り組を主力とする15000人の兵が佐和山城を包囲しました。三成は関ヶ原で敗れて湖北に逃走中で、このとき佐和山城には三成の父正継を主将に兄の正澄ら2800余人が布陣していたといえます。本丸は石田正継、石田正澄、正継の子の石田右近朝成、宇多下野守頼忠、その子宇多河内守頼重、土田東雲斎、福島次郎作、尾藤善四郎、大坂からの援軍である赤松左兵衛、長谷川宇兵衛などが守備を固めました。また、城の北端、かもう坂通往還を鳥居本側から登ってきた位置にあたる水の手を眼下に見る西の丸には河瀬織部、二の丸には石田養寿院、太鼓丸には番頭格の山田上野之助とその子山田隼人がそれぞれ配置されました。包囲する東軍方は、大手から小早川秀秋、脇坂秋月、小川土佐



佐和山城本丸から見た彦根城



守、朽木土佐守、水の手から田中吉政、松原内湖側の松原口から石田雅楽助、切り通し道の彦根側（太鼓丸下）より石川民部がそれぞれ攻撃を仕掛けました。家康自身は佐和山の南側にある正法寺山に陣を置いたとされています。少数の兵ではありましたが佐和山の守備は固く、執拗な攻撃によく耐えたようですが、兵力の違いはいかんともしがたく、長谷川宇兵衛が小早川に内通したこともあって形勢は東軍に一気に傾き、ついに佐和山城は落城してしまいます。この戦いのなかで、天守に火が放たれ、石田一族の正継、正澄、右近朝成、宇多下野守頼忠、宇多河内守頼重、三成の妻たちは自害します。そして城内を逃げまどっていた多くの子供たちも女郎ヶ谷に身を投じたということが伝えられています。

この佐和山城籠城戦を含む関ヶ原合戦後の論功行賞により、井伊直政に佐和山城が与えられ、彦根初代藩主として慶長6年（1601）正月、直政は上野国高崎城（群馬県高崎市）より佐和山に入りました。ところが直政は、関ヶ原合戦で受けた鉄砲傷が悪化して翌年死去します。直政よ



国宝 彦根城天守

り後事を託された家老木俣守勝は、城の移築計画を徳川家康に相談します。佐和山・彦根山・磯山（米原市）の3山を候補に彦根山への移築を決定しました。佐和山は中世以来の山城であり、敵将であった石田三成の居城でもありました。戦国時代を経て、戦の形態が山城を拠点としたものから、平地での足輕を主体とする集団戦に様変わりしたこと、城とともにその周囲に広大な城下町が発達したことなどが考慮され、近世的な平山城である彦根山が選定されたのでしょうか。

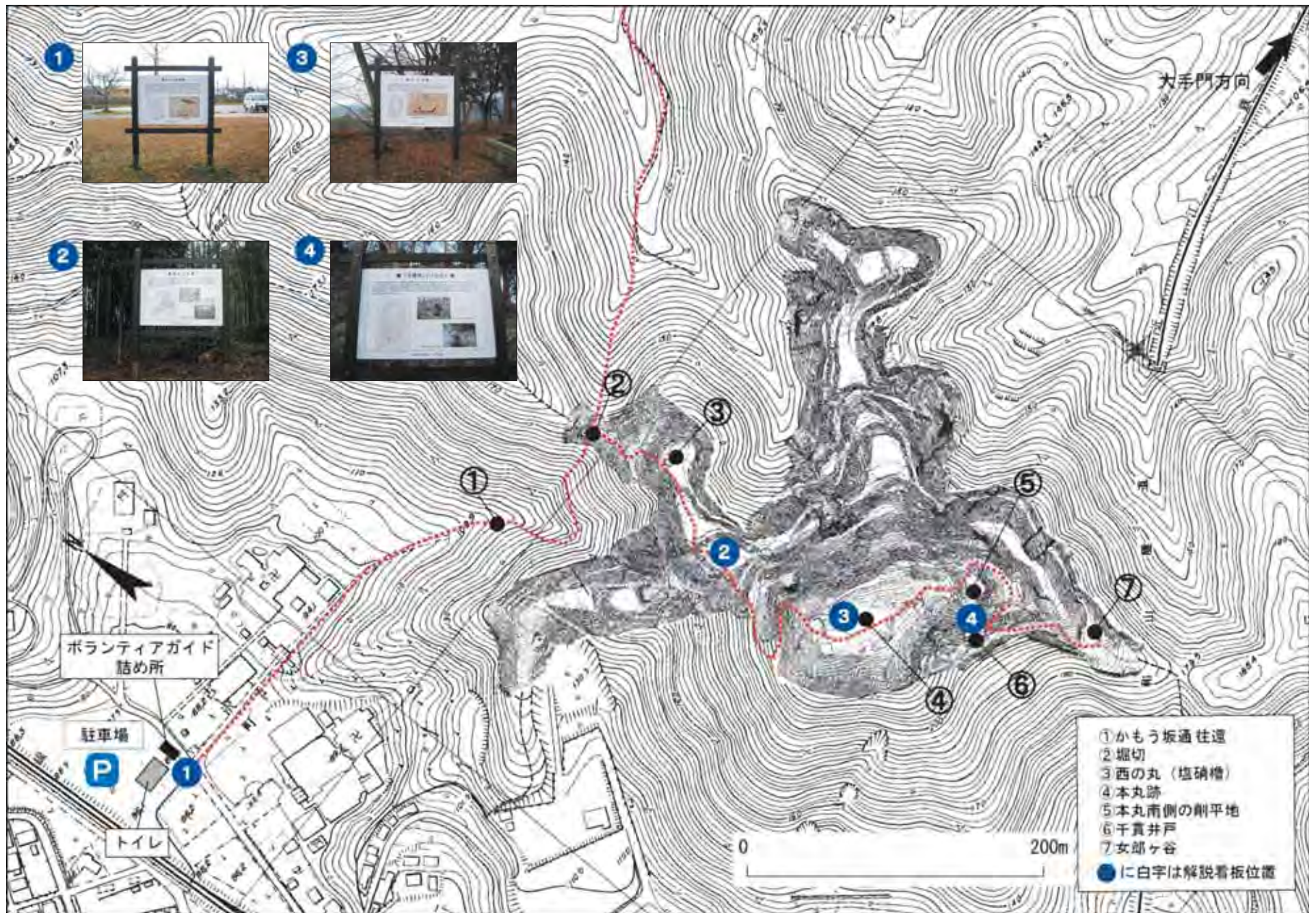
慶長9年（1604）7月1日、佐和山城の西方約2kmの彦根山において、新たな築城工事が始まりました。その際、佐和山城は破城を受け、石垣や建物の多くが彦根城へと運ばれました。こうして佐和山城は草木の生い茂るままに歴史の中に置き去られ、わずかに「佐和山城跡」の看板が往時を物語るばかりです。

彦根市教育委員会では、平成16年度から長期計画に基づいて彦根城の礎となった佐和山城跡の本格的な測量調査に取り組んでいます。また、古絵図や古文書、伝世資料などを対象とする佐和山城の総合的な文化財調査を実施しています。こうした調査によって、佐和山城にゆかりの遺構や資料が少しずつ発見されるようになりました。今後も、佐和山城の解明に努めるとともに、佐和山城跡の保存と活用がはかられることとなります。

6. 年表 佐和山城をめぐる攻防の歴史

浅井・京極・六角 境目の城	鎌倉時代初期		佐々木定綱の6男六郎時綱、佐保と号し、佐和山付近に館を設ける。
	応仁・文明の頃	1467-1486	六角高頼、犬上領を配下に置き、小川左近太夫ついでその子の小川伯耆守定武を城主とする。
	天文4年	1535	六角定頼、京極高延（高広）・浅井亮政を攻めて佐和山城を勢力下に置く。
	天文7年	1538	京極高慶、六角定頼とともに兵を挙げて佐和山山麓で京極高延と一戦を交える。この時、定頼の臣二階堂小四郎、若宮弥左衛門を討ち取り定頼より感状を得る。六角定頼に通じていた重臣多賀貞隆、佐和山城を落として百々三河守を城代にする。
	天文10年	1541	京極高広、執権浅井氏の専横を怒り、これを除こうとする。浅井久政、六角定頼に援助を求める。定頼、家臣の進藤貞晴を佐和山城に遣わし久政と互いに謀って、人質をとる。この時、坂田・犬上両郡の人質は佐和山城に収容された。その後、高広と久政は和睦する。
	天文21年	1552	京極高広、佐和山城を攻撃。六角義賢、荒神山に本陣を置いて高広軍に対峙するが敗れ、高広方は佐和山城を占領する。
	永禄2年	1559	浅井長政、家臣百々内蔵介に佐和山城の城代を命じる。六角義賢、伴中務少輔をたてて佐和山城攻めを命ずるが果たせず。
	永禄4年	1561	六角義賢、佐和山城を攻める。百々内蔵介戦死。浅井長政、佐和山城を奪い返し、磯野員昌を城代とする。
	永禄11年	1568	織田信長、浅井長政と同盟関係を結び、足利義昭を擁して上洛のため佐和山城に入る。
	元亀元年	1570	浅井長政、同盟関係を破る。姉川の合戦。磯野員昌、佐和山城に籠城。

織田信長	信長の居城	元亀2年	1571	磯野員昌ら籠城衆、信長に降伏して佐和山城を開城する。丹羽長秀、佐和山城に入る。
		元亀4年	1573	織田信長、犬上山中の材木を佐和山城山麓の松原に運ばせ、そこで大船を建造する。
豊臣秀吉	大名の城	天正10年	1582	本能寺の変に乗じて、若狭の武田元明、佐和山城を攻め落とす。明智光秀、荒木山城守を佐和山城に入城させる。清洲会議により、秀吉の将堀秀政、佐和山城主となる。
		天正13年	1585	四国へ出兵中の堀秀政、留守居多賀源介に命じて、北国征伐の準備のために佐和山城を修築する。堀尾吉晴、佐和山城主となる。
		天正18年	1590	堀尾吉晴、浜松城主に転封。
		天正19年	1591	4月、石田三成、代官として佐和山城に入る。
		文禄4年	1595	8月、石田三成湖北4郡19万4000石を治める佐和山城主となる。
		文禄5年	1596	石田三成、領内に掟書を発布する。佐和山城大改修。
		慶長4年	1599	石田三成、佐和山城に引退する。
徳川家康	井伊家の暫定居城	慶長5年	1600	関ヶ原の戦い。佐和山城落城。三成の父正継・兄正澄ら自刃して果てる。徳川家康、家臣の内藤信正・石川康道・西郷正員に命じて佐和山を管理させる。また、城下の治安のため、彦坂光景を代官に任命する。
		慶長6年	1601	井伊直政、佐和山城主となる。
		慶長7年	1602	井伊直政、関ヶ原合戦で受けた鉄砲疵が再発して佐和山城内で死去。
		慶長11年	1606	彦根城天守が完成し、この頃、直政の子直継、彦根城へ移る。佐和山城廃城となる。



7. 佐和山城周辺の文化財

清涼寺

清涼寺墓所には彦根で死去した歴代藩主7人のものをはじめとする59基の井伊家ゆかりの墓（史跡彦根藩主井伊家墓所）が造営されました。藩主の墓地には墓石を覆う木造の御霊屋や周囲を囲む土塀が江戸時代にあったことが当時の絵図には残されていますが、現在は失われ、全ての墓石が露出しています。



清涼寺境内

なお、井伊家の墓所はここ清涼寺以外に、永源寺（東近江市）、豪徳寺（東京都世田谷区）にも営まれています。

龍潭寺

井伊家発祥の地は静岡県引佐郡引佐町井伊谷ですが、彦根にも井伊家の菩提寺臨済宗妙心寺派の龍潭寺があります。つまり、遠州と江州の両地に龍潭寺があるのです。

方丈が元和3年（1617）の創建で、方丈南庭と書院東庭（彦根市指定文化財）は開山昊天の手になる枯山水と池泉式庭園となっています。

龍潭寺では井伊家の菩提寺でありながら石田三成の菩提も弔っていることも知られています。



龍潭寺門前（左）石田三成像（右）

井伊神社

弘化3年（1846）に社殿が造営され、遠州井伊谷から八幡神像が遷座されました。祭神は先祖である「伊頭鞆安彦命」です。明治2年（1869）現在の地に移され「井伊神社」と呼ばれるようになりました。社殿は日光東照宮をモデルとした権現造の建物です。



井伊神社

長寿院（大洞弁財天堂）

長寿院は、元禄8年（1695）彦根藩5代藩主井伊直興の発願によって建立された真言宗寺院です。本堂（弁才天堂）が重要文化財に指定されている他、阿弥陀堂、楼門、経蔵、宝蔵の4棟が県指定文化財となっています。

各建物は色鮮やかな彩色で仕上げられており、その外観から「彦根日光」とも称されています。これは、井伊直興が日光修造の総奉行を勤めたからとも言われており、日光修造に関わった甲良大工を彦根に呼び寄せて造営にあたらせたと推測されています。



長寿院（大洞弁財天堂）

弘化2年（1845）には、「御城下賑わいのため」として藩が桜を植樹し、花見や人形芝居の興業が行われるなど、多くの人々が訪れていたことが知られています。

● 鳥居本宿

鳥居本は番場宿と高宮宿にはさまれた中山道六十七次の六十三番目の宿場町です。中世には南方の小野に宿がおかれ、「佐和山城古図」では佐和山城下町に含まれています。彦根城下町への分岐点として整備されましたが、石田三成ゆかりの佐和山城下町を解消することが意図されたかのかもしれません。宿場町は道が鉤手に曲がる赤玉神教丸本舗あたりから展開します。本陣・脇本陣・問屋・高札場といった宿場の主な機能は、近江鉄道鳥居本駅への道との交差点付近(旧鳥居本村)に集まっ



上：道標（右彦根道 左中山道）
下：合羽屋の看板

ていました。軒下にぶら下がる三角形の看板は鳥居本宿特産の合羽を製造販売した店舗を示しています。街道筋には切妻瓦葺の屋根が道と平行してならび、軒裏に漆喰を塗り込めてベンガラ格子がかかった家並みにかつての面影を見ることができます。中ほどにある専宗寺の太鼓櫓の一層目の天井材に転用されている扉板は、佐和山城にあったものが使われたとされています。真偽は明確ではありませんが、佐和山城をしのばせる逸話です。南端から朝鮮人街道（彦根道）が分岐しており、この辻に立つ文政10年（1827）銘のある道標が彦根城下町への入り口を示しています。



赤玉神教丸本舗（県指定文化財 有川家住宅）

赤玉神教丸本舗は、万治元年（1658）頃の創業と伝え、店舗販売を主に、各地の薬屋と特約して取次販売なども行いました。その店頭販売の賑わいは『近江名所図会』などにも描かれるほどでした。現存する建物は宝暦9年～文化12年（1759～1815）の建築と伝え、幕末の和宮降嫁や明治天皇の北国巡幸の折には小休所に当てられました。主屋ほか5棟が県指定有形文化財になっています。

近江鉄道鳥居本駅は地元の請願により昭和6年（1931）に開業しました。赤い腰折れ屋根、正面の煙突、側面のアーチ型窓など、洋風デザインを凝らした駅舎は、平成15年（2003）には鉄道の日を記念した国土交通



近江鉄道鳥居本駅舎

省近畿運輸局管内の「近畿の駅百選」にも選定されました。

中山道 鳥居本宿 案内

